哲學研究　第百二十五號

プラトンのパイドロス（ジョン・バリ）

田中美知太郎譯

プラトンのパイドロスに關連して、二つの問題がある。それは、二つとも、かなり重要な問題でこれまでにも、種々相異つた仕方で答へられてゐる。第一のは、この篇の主題は何であるか？　といふのである。第二のは、この篇の――爾餘の對話篇に對する――相對的年代は如何？といふのである。

ある人々は、これをもつて、單に formal rhetoric〔言論の術〕を取扱つたものに過ないと、考へた。然るに、他の人々は、ソクラテスの第二の論に重きををいて、これは、主として、靈魂の性質、または上級の戀愛を論じたものであると考へた。また、ある人々は、これは、すべての對話篇の中でほとんど最初のものであると斷定した。然るに、他の人々は――人は、この方を、より多く信じ得るであらうが――これは、紀元前三八七年頃――その時分に、アカデミーが創立されたであらうと想像されてゐるのであるが――作られた一種の入門案内のプログラムであると見做した。

一

この主題については、もしも、それが、單に、レトリックを、實例によつて說明するといふ仕方で、取扱つたもの以上に出ないならば、すなはちその唯一の目的は、εὐτεχνια を κακοτεχνια λόγων から區別するにあるだけであるならば、その時は〔實例として與へられる〕言論の內容は、戀愛につ

いてゞあつても、靴の製造についてゞあつても、いづれでも、さしつかへなかつたであらう。

ところで、私は、全く何の連絡もない二つの主題を一つの對話が取扱つてゐるといふことは、プラトン的でないのみならず、また、實に、ヘラス的でもないと思ふ。——そして、このことは、人々の承認するところであると、考へてもよいであらう。また、我々は、プラトンが、靈魂及びイデアの性質といふやうな、斯くも重要な事柄に關する論說を導き入れてをきながら、これを、一の偶然的例證の目的に役立てる以上に、何の用にも立てなかつたと考へることも出來ない。何となれば、例證といふものは、重要さに於いて、常に、下位的なものであるから、そして、至極重要の事柄を單なる例證の目的に使用して、論全體の部分間のバランスを覆すといふことは、この上なく拙劣な技巧であるであらうから、のみならず、靴の製造を論ずる方が、この理由からすれば、よりよい例證であるであらう。

もし右の如くであるとするならば、我々は、この對話篇の形式上のモオティブと、そこに〔實例として〕與へられてゐる諸言論の內容との間の、何等かの連絡を覓めなければならない。我々は、一方に於いて、普通俗用のレトリックと哲學にもとづくレトリック——卽ち、δεινοῖς な者のレトリックと σοφοῖς な者のレトリック——との對照を見出す。これが、形式的側面である。また、他方に於いて、我々は、俗的戀愛と、哲學〔＝愛知〕に伴はれた愛との對照を見出す。これが、內容的側面である。この二つの側面は、如何なる全體に屬するか？——兩者の間のより高い連絡點は、何であるか？

ドクトル・トムプソンは、パイドロス篇をもつて drumamatized treatise on Rhetoris' と見做し、その

形式方面のモオテイブを、この篇全體のモオテイブと考へて、滿足してをられる。形式的には、勿論、この對話篇の目的は、〔言論〕のよきスタイル惡しきスタイル――卽ち、εὐτεχνια と κακοτεχνια λογων――との間の區別をきめるところにある。然しながら、形式は內容に相關し、また、一つのコムポヂションのスタイルは、衣裳のやうに、その主題にあはなければならない。從つて、そこに、プラトンの立入らなければならないもう一つの問題が生ずる。――卽ち、アイデアルなレトリックに合ふ主題は、何であるか？　すべてのレトリック――善惡いづれでも――が目指してゐるところは、說得することである。――而して、このことは、他人の靈魂にはたらきを及ぼすことを意味する。抑も、如何なるはたらきを及ぼさうとしてアイデアルなレトリックを修めた人は骨折るのであらうか？　卽ち、具體的な形で言へば、如何なる境涯に、彼は、靈魂を導かむと試みるのであらうか？

かくて、すなはち、二つのものが、きめられねばならなくなる。

一、レトリックの眞の方法――その形式

二、レトリックの眞の目的――その內容

(一)の問題に對する答へ――形式上のモオテイブは、この對話篇の後の部分に與へられてゐる。一つの言論は、「一の靑銅の乙女」〔パイドロス二六四Dを見よ〕であつてはならぬ。――それは、逆樣にすることも出來るし、部分間には何等の秩序もない。それは、一の有機體でなければならぬ。――初め・中・終りを有し、逆樣には出來ないやうな秩序を有してゐるものでなければならない。定義と分類が必要である。また、それ故に、レトリックは、方法上、哲學に依存してゐる。かくして上級のレトリックは、俗間のレトリックから區別

される。すなはち、それは、ダイアレクティックと下級のレトリックとの間に立つてゐる。

（二）に對する答へは、ソクラテスの第二の論の中に含まれてゐる。レトリックの眞の目的は、靈魂を、その屬すべき領界、卽ち、それと親しい類同關係をもつてゐるイデアの世界へ導くにある。このことを完全に果し得るものは、たゞ純粹の哲學あるのみであるが、然し、このことは、一種のインスピレーションによつても、或る點までは、果され得るのである。――そのインスピレーションとは、例へば、肉體の美によつて生ぜられ、戀愛と呼ばれてゐるやうなものである。かくの如くインスピレーションを得た者は、そのインスピレーションを、その愛する者の靈魂に傳へ、さうしてその靈魂を、イデアに接觸せしめやうとする。――而して、そのレトリック〔說得の術〕こそ、上級のレトリックであらう。ソクラテスが、パイドロスやシムポジオンに於いて使用してゐるのも、これである。なほ、この場合〔＝パイドロス〕のソクラテスのレトリックは、全體にわたつて、インスピレーションを含んでゐる（dithyrambic ――〔パイドロス二三四D及び二三八D等を見よ〕）。――その場所、そのニインフたち〔の像〕、その蟬などの影響の下に、眞のレトリックと眞の戀愛とは、共に、インスピレーションである。

されば、アイデイアルなレトリックは、哲學と俗間のレトリックとの間に立つてゐて、未だ哲學には與つてゐないが、なほ卑俗となつてはゐない靈魂、卽ち、哲學的〔愛知的〕ではないが、神のあるはたらきかけによつて、卽ち θεᾳ Μοῖρα 純粹に保たれてゐて（ポリテイアに於けるグラウコンやアデイマントスのそれのやうに）、汚されずに、この世を通り過る事が出來るかも知れないやうな、さういふ靈魂を導くために適用されるのである。

これらは、所謂「美しきたましひ」schöne Seelen である。そして、これらの人々は、ウオズウオスがそれについて、彼等は、青年の生々した感能をもつて 'do Thy work and know it not' ——戀愛の光によつて導かれてゐるのであつて、眞理の光によつて導かれてゐるのではないから——と言ふてゐるところの人々である。アイデアルなレトリツクは、かくの如き靈魂を、哲學の領界へと導くことが出來るかも知れないのである。

かくて、我々は、次の比例を得る。

哲學：上級の戀愛＝哲學的スタイル：
上級のレトリツク＝哲學者の靈魂：美しき靈魂

パルメニデス・パイドン・ソピステス等に於いて我々が有するものは、純粹な哲學的スタイルの例であり、パイドロスとシムポジオンに於いて、我々が有するのは、上級のレトリツクのそれである。

從つて、パイドロスの對象についての探究に對する眞の答へは、アイデアルなレトリツクの內容と形式の兩者をきめることであるであらう。

二

哲學的見地からすると、一つの對話篇の絕對的年代は、あまり重要ではない。重要なのは、對話諸篇の相對的年代——すなはち年代順——をきめることである。ある場合には、このことをきめる直接の指示が發見される例へば、パイドン〔七二E か〕に於けるメノンへの指示。他の場合には、我々は、その哲學的內容から判斷しなければならない。

パイドロス（二六〇E）は、大體、ゴルギアス〔四六三B か〕を指してゐるとすることが出來るから、從つて、パイドロス篇は、ゴルギアス篇の後といふことになる。そして、ゴルギアス篇は、充分圓熟した產物であるから。パイドロスを非常に初期

のものとすることは、信じ難いことゝなるであらう。むしろ、パイドロスにあらはれた哲學を考へて見るならば、我々は、これに、比較的後の年代をつけることを、容易には、避け得ないであらう我々は、少くも、それを、パイドンの後にをかなければならない。――そのことを、私は、〔次に〕示すことをつとめるであらう。

プラトンが、靈魂の不死を公に取扱つてゐるのは、三つの對話篇に於いてゞある。――即ち、パイドン・パイドロス及びポリティア。それは、明白に、パイドンの對象である。その他の二篇に於いては、それは、副次的に關心されてゐる。我々はパイドン及びパイドロスに於けるその論證を比較して見やう。

パイドンの最後の論證は、大略、次の如きものである。

一の原理を含むものは、その原理の反對を受け容れない。もしその反對が近づくならば、それは亡びるか、退去するかである。靈魂は、生の原理を、含む。從つて、その反對なる死を受け容れない。從つて、死が來る時は、それは、亡びるか、退去するかである。然るに、靈魂は、原理的に生きてゐるものであるから、第一の場合、即ち破滅は、不可能である。則ち、靈魂は退去する。――破壞されずに ἀναλεθον

この論證は、次の前提の上に立つてゐる。

一、ζωὴ ἐστιν ἀναλεθον〔生は不滅〕

二、靈魂は、生を含み、生をになつてゐる。

こゝに注意しなければならないのは、プラトンは、(一)については、たゞ一つ σχολῇ γὰρ ἄν τι ἄλλο φθορὰν Μὴ δεχοιτο εἰ γε τὸ ἀθάνατον ἀιδιον ὂν φθορὰν ὀεξεται〔何となれば、もし、萬一、死に反對的で、然も、永遠なものが、破滅を受けるやうなことがあらうものならば、他の何ものかゞ破滅

を受けずにゐるといふことは、ほとんど不可能となるやうなことになるであらうから」といふ言葉（一〇六D）で、説明を與へてゐるだけであるといふことである。――然も、これは、ナイヒリストによつて疑はれ得るところのものである。また、（二）については、プラトンは ψυχή の ζωή に對する關係を、一の species の一の genus に對する關係として、他の可能なる species を拒外することなしに、取扱つてゐる。この二つの不備は、パイドロスに於いて補はれてゐる。

パイドロスに於ける論證は、次の如くである。

自動者は、常に動く。何となれば、自動 αὐτοκινητα は、不斷の Beisichsein を意味するから（ἅτε οὐκ ἀπολείπον ἑαυτό）。そのものは ἀρχὴ κινήσεως〔動の根源〕である。從つて ἀγένητον καὶ ἀνώλεθρον〔不生不滅〕である（ex nihilo の原則による）。然るに、外部性 externality は、他によつて動かされることを意味する。從つて、肉體は、自動的ではない。從つて、〔この場合〕、自動的なるものは、靈魂である。すなはち、自動は、靈魂の οὐσία τε καὶ λόγος である。從つて、靈魂は不死である。

この論證は、前のに比較して、二通りに、優れてゐる。

（一）には、それは、生が不滅であるといふ前提を生の本質は何であるかを示すことによつて、――その本質は αὐτοκινητα 卽ち、mechanism の否定である――證明してゐる。プラトン自身も、パイドンに於いて、そこの彼の論證は、最完全のものではなくして、次善的なものであるといふことを、説いてゐる（九九D）。αὐτοκινητὰ（τὸ αὐτὸ κινοῦν〔τὸ αὐτὸ κινοῦν？〕）のカテゴリは、アナクサゴラスを研究してゐた時に、プラトンが、アイチア論上の困難を解くが爲に、發見したところの解決なのである。

(二)には、バイドンに於いては、靈魂は、生の下に屬するものとされてゐるが、バイドロスに於いては、靈魂と自動者が、同一とされてゐる。そして、このことは、有と思想とを同一とすることに等しい。

これらの考察からして、我々は、バイドロスはバイドンの後に作られたと、結論することが出來るであらう。そして、この結論は、叙述の仕方を比較することによつて、一層確實と考へられるやうになる。バイドンに於いては、叙述は、分析的である。そして、バイドロスの綜合的な叙述に對して、了度、デカルトの Meditations が、あの Principia に對する關係、または、カントの Kritik der reinen Vernunft が、その Prolegomena に對する關係に、似寄つたやうな一つの關係をもつてゐる。

バイドロスがポリテイアよりも後であるといふことも亦、靈魂の三分に關する文章を比較することによつて、信じ得べきものと、見えるであらうこの三分説は、バイドロスのミトス(二四六A)の中に、既知のものとして取り入れられてゐる。これに反して、ポリテイア第四卷に於いては、それは、一の新説として紹介され、詳細に證明されてゐる。——尤も、ソクラテスは、その證明は、それ自身で、充分または滿足といふことは出來ないのであつて、たゞ、考察の性質上、不足ないといふべきのみであるといふことを、認めてゐる。彼は、第四卷(四三五D)に於いては、短い方の道をとつた。然しながら、第六卷の論證のより高い段階に達した時、彼は、長い方の道 (*Μακροτέρα περίοδος* 504 B)をとることが必要であるといふことを、見出した。私は、第四卷の靈魂の *εἶδη* に關する議論と、第六卷の靈魂の *Παθήματα* に關するそれとの關係を檢することは、これを、他の機會

に讓らなければならない。たゞ、私は、パイドロス二四六Aの *θεία καὶ μακρὰ διήγησις* は、ポリテイア四三五Dの *μακροτέρα καὶ πλείων ὁδοῦ* 及び同五〇四Bの *μακροτέρα περιόδου* を、意識的に、指示してゐるのであるやうに見えるといふことを、指摘しでをきたいと思ふ。（をはり）（The journal of Philology Vol. XV による）

〔 〕は譯者の附加、恐らくは蛇足ならむ。